

# 經濟論叢

第十四卷 第六號

故名譽教授神戸正雄博士遺影および筆蹟・原稿

統計学=社会科学的認識手段論の 問題点……………	大橋隆憲	1
資本主義の運動法則における 論理的なものと歴史的なもの(二)…	吉村達次	17
急速税務減価償却をめぐる 所得税会計の保守主義……………	高寺貞男	37
ヘンリ・ジョージについての一考察…	北沢康男	55
ソースタイン・ヴェブレンに関する 一研究……………	中山大	68
神戸正雄先生による 再保険特約方式の輸入……………	佐波宣平	85
<b>記事</b>		
神戸先生御逝去……………		91
追憶文……………		96

新村出	井藤半弥	本庄栄治郎	小島昌太郎
石川興二	樋川虎三	大谷政教	小山田小七
堀江保蔵	島恭彦	松井清	

昭和三十四年十二月

京都大學經濟學會

## 神戸先生を憶う

本庄栄治郎

『君子之交淡若水』というが、神戸先生の一生は正にその通りであった。生涯を通しての研究生活、何人にもわけへだてのない、いつも委らぬ態度、一度も怒られたことのない、しかも情愔に厚い先生、いま私どもはこの先生を喪って誠に痛惜の情に堪えない。

大学教授時代の神戸先生は、ほとんど毎日研究室に求められた。学部長をつとめられたときでも部長室に入られたことは全くなく、研究室で研究の傍ら事務を見られた。先生と研究室とはきり離すことのできぬものであった。

教室において先生は静かな口調で講義をつづけられた。学生がきいておろうがなかるうが、そんなことは問題ではなかった。ある卒業生の話に、教室に自分一人しか出席していなかったとき、先生が来られたので、先生に私一人ですから今日はお休みにして下さいと申し上げたところ、先生はやはり講義はやりましようといわれて、いつものように講義された。二十分程おくられて一人の学生が入って来た。このようにして二時間の講義が終ったという。先生は講義することは自分の本務であるからというお考が強かったのであろう。

講義ばかりでなく研究会でも先生は必ず出席される。そして黙々としてきいておられる。静かに質問され諄々として説かれる。教授会の場合でも、くどくどしい説明や、よけいな議論をせずに、要領よく事をきめて行かれる。それで教授会はいつも一時間ないし二時間位で終つてしまふ。

先生は二三年四月に公選第一回の京都市長に当選された。これは先生の人徳の然らしめたところであろうが、終戦後の混乱時代に、ことに何かと問題の多い京都の市長になられたことは私どもには全く意外であった。しかし先生はよくその困難に堪えて、地方自治や六三制教育の確立、地域の拡張、中央市民病院の開設その他市政の上に大きな業績を残された。市会の質問などでも、先生は真面目にこまでは私にもわかりませんが、これ以上はわかりませんといわれる。この調子では議員も先生に比べてかかることができず、助役に銚先を向けたということを知っている。また東上される場合に随行者が三等で行くと先生もそれに同席され雑沓している車中に黙然としておられたという。後に地方行政調査委員会議長になられたとき、学士院でお目にかかり御挨拶申し上げたところ、先生は『この方がよっぽどよい』と一言述べて破顔微笑されたことは今も眼前に彷彿している。

先生は早く御子様も夫人もなくなされた。全く家庭的にお淋しかったことと思う。しかし先生は早くから京都大学に深い愛情

を持つておられた。東京大学からしばしば転任の交渉があったようであるが、先生は京都大学を去らぬという固い信念を持つておられた。その後経済学部が独立したが、京大経済学部こそは先生の子であった。一切の公職を去られた後も経済学部の研究会に出席されたり、特別の援助を続けられたことは周知のことである。三二年九月に公にされた「三訂財政学講義」の序文に『財政学は私の愛児である。私が学問の上でのあと日まで継がそうとしていた子どもを亡くしてからは、財政学だけが私の子どもとして残っておる。(中略)此に公刊するのは、是れから講義して見ようと思つておる其の講義の草稿である。』と述べられているが、私は何らかの機会に、先生の子である経済学部でこの講義をもう一度ききたかっと思つたが、それはもうかわぬこととなつた。誠に惜しいことである。